

関西あそび 西歩

KANSAI ASOBO ぼ

京都・大阪・神戸・堺 まち歩きラリー

古代より続く名水のまち・御影郷を訪ねて

～レトロ下町と、酒蔵巡りと、哀しき処女塚と～

神功皇后が湧き出る水面に、その姿を映したことから名づけられたという御影。古代より名水処として知られ、近世には酒造のまちとして発展し、灘五郷のひとつ・御影郷として有名です。御影の酒蔵巡りを中心に、昭和の雰囲気の色濃く残すレトロな商店街や、悲恋物語の舞台となった古墳などを巡ります。

1 御影旨水館

前身は大正9年(1920)に御影町上弓場にできた「中西市場」で、昭和10年(1935)に現在地に移転。豆腐店、呉服店、パン工房、履物屋、和菓子処、蒲鉾屋など庶民的な店舗が立ち並び、「創業50年を越える」といった老舗も多く、地域密着の商店街として親しまれています。

2 沢の井の跡

六甲山系で蓄えられた美味しい硬水が地下水脈として流れている御影は、古代から名水処として知られ、地域の人々に恩恵を与えてきました。沢の井は、その名水処のひとつで、伝承では神功皇后が沢の井の水で化粧をしたといいます。また、この沢の井の水で酒を造り、それを後醍醐天皇に献上したところ、ご嘉納(褒め喜んで受け取るという意味)になったので「嘉納」の姓を賜ったのが、現在の嘉納財閥(菊正宗、白鶴など)の祖といわれています。

3 白鶴酒造資料館

寛保3年(1743)創業。資料館は大正初期に建造され、昭和44年(1969)3月まで本店1号蔵として稼働していた酒蔵をリノベーションしたものです。往時の酒造りの様子がわかる酒造道具の展示、きき酒コーナー、資料館限定のオリジナルグッズなどの販売コーナーがあります。

4 菊正宗本社

創業万治2年(1659)の蔵元・菊正宗の本社で、石造の重厚な建物は、大正14年(1925)の建築です。菊正宗酒造を営む嘉納本家は「本嘉納」と呼ばれ、白鶴酒造の嘉納家は「白嘉納」と呼ばれますが、この嘉納一族の末裔には、講道館柔道の創始者で「柔道の父」「日本の体育の父」と呼ばれた嘉納治五郎がいます。また嘉納一族は灘中学・高校の母体となった灘育英会の出資者としても有名です。

5 剣菱本社

正確な創業年は不詳ですが永正2年(1505)頃の史料に「剣菱」という名の酒の記録があることから500年以上前から存在するといわれています。徳川将軍家の御膳酒に指定され、赤穂浪士は討ち入り前に出陣祝いとして振舞い、また「鯨海酔侯」とまで称した酒豪の土佐藩主・山内容堂が愛飲したことでも知られています。室町から大正にかけては伊丹郷で営業していましたが、昭和4年(1929)に灘郷に移転しています。

6 瀧鯉蔵元倶楽部酒匠館(閉館)

宝暦8年(1758)創業で、平成21年(2009)に惜しまれつつも廃業した木村酒造の蔵元でした。江戸時代に建てられた風格ある建物は平成9年(1997)のNHK朝の連続テレビ小説『甘辛ちゃん』の撮影舞台にも使われました。

7 石屋川

かつて六甲山から切りだされた御影石を加工する石材屋が川沿いに軒を連ねていたのが石屋川といわれます。また野坂昭如の小説『火垂るの墓』では、主人公の清太・節子兄妹が神戸大空襲から逃げ出すシーンで石屋川が登場しますが、それを記念して石屋川公園の広場(国道2号線南側)に『火垂るの墓』の記念碑があります。

8 泉勇之介商店

初代・泉勇之介が明治初期に蔵元の姓「泉」と地元「灘」にちなんで「灘泉」を創業。昭和の風水害や戦災、平成7年(1995)の阪神淡路大震災でも被害を受けましたが見事に耐えて、数少ない木造蔵の雄姿を守りつづけ、現在ではその希少性から国登録有形文化財に指定されています。予約をすれば酒蔵見学もできます(平日のみ。土日祝は休み)。

9 神戸酒心館

創業宝暦元年(1751)。清酒「福寿」の蔵元として有名です。蔵出ししたばかりの生酒や季節限定のお酒などの直売所「東明蔵」や、歴史ある酒蔵の長屋門を利用したギャラリー、酒蔵の雰囲気の中で自家製豆腐、蕎麦などが味わえる料亭「さかばやし」などがあります。

10 東明八幡神社

神功皇后の三韓征伐の出航時に武内宿禰が戦勝祈願として当地に若松を植えると瞬間に大木に育ったので松の傍らに祠を建てて神霊を勧請したのが神社のはじまりといわれます。この松は江戸時代には幹回り5メートルの巨木となって「武内松」と呼ばれて摂津名所にもなりましたが、残念ながら明治初めに枯死してしまい、いまは2代目の松となっています。また東明という名の由来は、武内宿禰が魚崎で軍船を造るのを、この付近から「遠目」に見ながら指図したからという説がありますが、定かではありません。

11 処女塚古墳

4世紀前半頃に築かれたと推定される全長約70メートルの前方後方墳です。昔、当地に菟原処女(うないおとめ)という美しい女性がいて、芽淳壯夫(ちぬおとこ)と菟原壯夫(うないおとこ)が求婚しましたが、菟原処女はどちらとも決めかねて迷った末に自殺してしまい、残された男性2名も後追い自殺しました。処女塚古墳は、その菟原処女の墓で、また灘区都通の西求女塚、東灘区住吉宮町の東求女塚が男性2人の墓という伝説があるのですが、古墳の築造時期が異なるので事実ではないと思われます。しかし古代より有名な伝説だったので、すでに『万葉集』で高橋虫麻呂、田辺福麻呂、大伴家持の3人が菟原処女を歌い、平安時代の『大和物語』にも収録、また謡曲『求塚』となったり、森鴎外も戯曲『生田川』などを書いて、連続と物語は受け継がれています。

